

パネルディスカッション「関係人口のつくり方」

第二部

司会者：これよりパネルディスカッション2部を始めさせていただきます。登壇されている方々をご紹介します。皆様から向かって右側より、発表団体、徳島県徳島市長、内藤佐和子(ないとう さわこ)様。島根県邑南町長、石橋良治(いしばし りょうじ)様。お二方より事例をご発表いただきます。進行役は、引き続き田口様をお願いしたいと存じます。田口様、よろしくお願いたします。

田口先生：では、第2部を進めたいと思います。先ほどは北海道と岩手県でしたが、今度は島根県邑南町と地元徳島市の2つからご発表いただきました。まず石橋町長からお願いします。

邑南町長
石橋 良治

(1頁)

改めて皆さん、邑南町町長の石橋です。今日はよろしくお願いたします。邑南町で取り組んでいる関係人口と協働するまちづくりというテーマで発表します。関係人口に絞り、さらに10分という短い時間ですので、町が取り組んでいる様々な施策には触れていません。ただ最近では脱炭素先行地域の一つに選ばれました。これは島根県でも唯一でございます。

本日の発表のテーマは、いわゆる全国各地で問題になっているJRをはじめとする廃線の問題、これをどうするかという点について、これに絞って発表します。したがって、どうやって関係人口を築いたかということですが、かなり泥臭い話になると思います。

(2頁)

では始めます。まず、ここに「観光」やめます。「関係」はじめますと出ています。これは邑南町が2020年に新しい観光戦略を考えたときのタイトル、キャッチコピーでございます。

(3頁)

今までの観光は、どちらかといえば一方的におもてなしということで、地元も疲弊感を持っていました。中には人口減少、高齢化ということで、これ以上つづがないねという状況にもなっています。所謂オーバーツーリズム、これでは持続可能にはなりません。従って、やはり関係というところに注目して、住民と

共働で楽しむことに着眼をしました。楽しむと言うことについては、その地域には必ず課題があります。これを関係人口の方々と一緒に解決し活性化に取り組む、それを機に訪れる方を増やしていく、この意味合いで従来の観光を止めて関係を築くという切り口にしています。

(4頁、5頁)

きっかけは JR 西日本の三江線(さんこうせん)という、島根県の江津市から広島県三次市に続く、108 キロの非常に長い路線が廃線になったということがありました。これは大変だ、これは地域の大きな課題だ、しかしこれに負けてはならないという思いが当時からあります。

(6頁)

これは邑南町全体の図です。島根県は東西に長いですが、黄色で表していますが、その真ん中に位置している邑南町です。まさに中国山地の真ん中、人口1万人で農林業が中心の地域です。その中で三江線が通っている地域が東端の阿須那というところと口羽です。これは合併するまでは、旧羽須美村でした。

(7頁)

邑南町のいいところは高速道路で広島市に約1時間で行けること。広島は約120万人いるので、そこは有利性があります。その中で、どこでもそうだと思いますが、羽須美という地域は戦後から数えると昨年まで人口が81%も減っているという、厳しい地域です。高齢化率も邑南町全体では45%ぐらいですが、なかでもここは56%に達している。

(8頁)

その地域に唯一走っていた、JR 三江線が2018年3月31日で廃線になるという大きなニュースでした。こうやって三江線の廃線が、地元紙でも大きく報道され、JR 西日本の路線はいろいろありますが、108キロという長い路線は今回の例でした。

こうした重要なインフラが消失したわけですが、放置すれば大変大きな負の遺産になるという課題です。廃線のニュースが駆け巡ったあとから、廃線になるぞと全国各地から最後に乗ろうと、これは宇都井という駅ですが、高さが20メートルもある全国でも高い駅舎です。そこに全国から駆けつけて廃線になる前に乗ろうと、こんな風景を見ると廃線にはなるけれど、これだけの鉄道ファンがいるし、これを関係人口ととらえて、ぜひ、宇都井の駅舎も含めて、鉄道資産として活用しようというのが町でも地元でも行政でも機運が高まったという時期でした。

(9頁)

廃線直後の2018年5月に、NPO法人江の川鐵道が設立されました。これは、廃線後、さまざまな形で利用しようという江の川鐵道の皆さん方でした。現在、

28人の正会員が地元の方中心にいらっしゃいます。団体も12団体と増えていきます。主に三江線を本当に好きで愛している人たちがトロッコ運行を目指そうという団体です。

(10頁)

廃線前に行政としては、これで意気消沈したら駄目だということで、2017年に町に羽須美振興推進室を立ち上げ、専属職員を2名配置しました。この辺から総務省の関係人口が言われてきたので、ここの関係人口創出事業のモデル事業にチャレンジしようとして、見事に採択いただいたところです。

(11頁)

言うは易く行うは難しですが、はじめてトロッコにチャレンジするわけなので、いろいろな方の知恵、マンパワーが必要だと、大きな課題としてありました。いずれにしても、トロッコを中心とした賑わいをぜひ生み出そうという思いがだんだんと出て来ました。

(12頁)

このトロッコは、最初は簡単なものでして、エンジン付きの手作り感のあるトロッコでした。ここには交流人口ということで、トロッコに乗りたい人も来れば、関係人口として、例えば運行のお手伝いをする人が徐々に増えてきたということです。運転をするのは、NPO法人江の川鉄道の人です。これは西日本JRから運行に関する知見を学んでスタートでした。

(13頁)

運行を始めて、アンケートをとりました。トロッコに乗っている方々へアンケートをしたところ、ひとつは住民の思いを応援したいという関係人口の方々。2つめには地域資源に愛着がある、鉄道が好きという人。3つめには地域課題解決に貢献したい。私はここが一番大事かと思いますが、地域が困っている大きな課題については、自分たちもチャレンジして皆さんと一緒に前に行きたいという方がいらっしゃる。この3つの思いが関係人口をつくる上で、手助けになったと思っております。つまり、地域で廃線という大きな課題を解決することと、関係人口を鉄道ファンという形でかけ算をして、この地域の持続性を高めていこうということが関係人口については非常に大事なことだということがわかりました。

(14頁)

こういうかたちでトロッコもだんだん盛り上がってきて、成功体験が積み重ねられ、皆さん方も自信を持ってトロッコ運行に取り組むことができたということで、NPO法人江の川鉄道ができてから4年、現在も活動が進んでいます。

(15頁)

成果をまとめて述べたいと思います。こうした鉄道ファンを中心とした関係

人口の増加という中で、観光客も地域には増えてきているという事実があります。一番のコアメンバーは地元の方、地元に住んでいらっしゃる方々が10人で中心メンバーがおられ、そして関係人口は現地に行って支援をしてやろうというのが35人まで増えている。江の川鐵道会員数も20人だったが、今は町外から100人になっている。そして江の川鐵道を応援しようというふるさと納税も340人、現状ございます。観光客もこうした取組の中で、よく頑張っている思いを感じられて当初はトロッコ運行を中心として500人のスタートでしたが、今の観光客は昨年で2000人に増えています。

(16頁)

成果の2番目です。トロッコも2018年の初代は乗客はたった3人だけしか乗れなかったのが翌年から2020年、2代目がトロッコを連結するように客車も増やして。

(17頁)

現状では7月から3両体制に生まれ変わりました。6人から今は10人。一番前が機動車。真ん中と最後尾は客車、このように増やしてきました。

(18頁)

ではどのように資金を集めてきたのかということですが、ふるさと納税の支援の輪を拡大していきました。ふるさと納税型クラウドファンディングというのがありますが、340人からトロッコを新しくしたいという発信の中、必要な改造費約800万円を目標にしたところ、816万円が集まり、これは非常にありがたかったです。

(19頁)

今では江の川という中国地方で一番大きな川がありますが、そこに橋が架かっています。JRが所有している橋ですが、JR西日本の了解を得て、トロッコが初めて橋を渡り、対岸の広島県に渡ったところなんです。こうした小さなトロッコが県境をまたいで運行した事例は、あまり聞いたことがないのですが、隣の広島県三次市の協力を得て、こうしたことが実現でき、マスコミも注目し新聞、テレビに出て、さらにこれがお客様の増加に繋がったという状況です。

(20頁)

成果の5番目としては、関わり方の深まりと地域への広がりです。1つは右のように枕木の交換などを関係人口の方々に一緒に手伝っていただけるということがあります。所謂鉄道資産の保全を関係人口が支えています。

専門家集団も技術的支援という面で必要になっていきますので、島根県技術士会にも協力をいただいて、安全運行のために、橋、駅舎など維持管理のために協力いただいています。

さらには左の写真のように、関係人口の方々、鉄道ファンと一緒に地元の方が、

特産の芋を植え付けている。まさに、地域の方々も非常に喜んでいるという姿です。

(21頁)

このように関係人口が幸いにどんどん広がっている話をしましたが、それ以外に実はおおなんDIY木の学校というのを作りました。DIYなので自分たちの手で、例えば家を改修するような、学びの学校です。今、DIYをやってみようという人が、全国的にも増えていきますので、そういう方々に呼びかけて、4年間やっていますが、延べ200人の受講生がいます。そして成果もどんどん出ていて、生徒たちが5軒のゲストハウスやカフェに改造、改築したりと、見事に地域でよみがえっている状況があります。

(22頁)

それから、2つめの小さな事例では、昨年、久喜銀山が邑南町にあります。ここは昔から銀を採掘していた場所です。これが世界遺産の石見銀山と関係があるという話もあったりして、価値のあるということで、国史跡になったということもあり、これを関係人口で盛り上げようとなりました。ひとつは、広島市内で久喜銀山のガイドの担い手を養成する目的で、講座を開きました。右は草刈りをしていますが、これは広島市の修道大学の生徒さんたちが、休みのたびに通って、草刈りで応援いただいて、自分たちもガイドを目指している。こうした関係人口ができてきました。

(23頁)

最後ですが、まとめますと、解決する課題と関わりしろの設定。関わりしろというのは、何をやってもらうのか、という役割、それを明確にするのが大事です。そしてそれを関係人口として捉えて、地域に誘導する仕掛けが大事です。

そのことで、地域へ貢献され、関係人口の方々が満足感を覚えてもらう。一方、地域ではあきらめていた、「もう駄目だ」という意識が、一緒にやってもらえるということでヤル気が出てくる。お互いに面白い・関わりたい地域として、この地域、まさに羽須美地域は変化を起こしています。住民、移住者、関係人口が行き交う羽須美地域になっていると実感しています。これからは、この関係人口をさらに増やすための、ひとつのアクセスポイントとして、ゲストハウスや道の駅に関係案内所を数カ所設置したいと、準備しております。

以上、邑南町の関係人口の取り組みについて発表しました。ご清聴ありがとうございました。

田口先生：ありがとうございます。邑南町の鉄道の跡地活用の取り組みは、関係人口の話のときによく出てくる話です。なんととっても、関係人口を社会的に広

めている、ローカルジャーナリストの田中輝美さんも、この取組をご著書やご講演なのでよく紹介されています。地域で不足しがちのマンパワーを地域外の人が率先して動かしてくれるというすごい良い事例です。関係人口について、どんどん新しい取組がはじまっている関係人口の聖地的場所だと思います。おそらく冒頭にもあったように、町は、関係人口はワン・オブ・ゼムであって、いろいろな取り組みの中であると思いますので、後ほど広がった話をしていただけたらと思います。

ありがとうございます。次は徳島市です。今までの自治体は比較的小さなところでしたが、今度は県庁所在地という、地方の大きな都市の関係人口はどういうものかについて、ご説明をお願いいたします。

徳島市長
内藤 佐和子

(1 頁)

この写真は、3年ぶりに街中で本格開催した8月の阿波おどりの総踊りの写真です。総踊りをはじめとして、盛況のうちに閉幕しました。それも多様な形で、阿波おどりを支えてくださった、多くの関係人口の皆さま方のおかげだと感謝しています。本当にありがとうございます。

本日はその徳島が世界に誇る、阿波おどりを通じた関係人口づくりについて、徳島市の取り組みを紹介します。よろしくお願ひします。

(2 頁)

その前に徳島市について簡単に紹介させていただきます。イメージを持たれていない方もいらっしゃるかもしれませんが、徳島市は市内に134本もの川が流れる「水都」でございます。川で囲まれた中心市街地は、その地形から「ひょうたん島」の愛称で親しまれており、川から街の景色を眺めながら、本当にゆっくりと巡ることができる周遊船も周航しています。ここの周遊船は、ひょうたん島クルーズといい、市民、観光客に人気のコンテンツとなっています。

2つ目です。徳島市最大の観光資源である、阿波おどりで、400年以上の歴史を持つ徳島が、そして日本がとも言えると思いますが、世界に誇る伝統文化だと思っていますし、国内外から訪れる日本有数のイベントです。

一方、この下にもありますが、政策面ですが、市長に就任したのが2020年4月ですが、そこからダイバーシティに積極的に取り組んでいるまちということで積極的に推進しています。パートナーシップの宣誓制度も、私が就任前から取り組んでいましたが、その中で使用できる行政サービスを私が拡充していくと共に、子どもなども家族と認めるファミリーシップ制度も全国で2番目に導入

しました。

また、生理用品を無料提供できるシステムを民間企業、NGO との連携によって市の施設に小中学校含めて設置したほか、働く女性活躍推進などジェンダーギャップの解消への取り組みに関してもフェムテックなど関係人口の創出に一役買っている部分もありますが、限られた時間ですので、今回は阿波おどりに絞って関係人口についてお話いたします。

(3頁)

「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃ損々」このフレーズは聞いたことがある方もいらっしゃるでしょう。そのフレーズを用いまして関係人口によって阿波おどりを世界に広める仕組み作りを図に沿って説明します。

踊る阿呆、見る阿呆、支える阿呆、さらには繋がる阿呆といった関係人口で伝統文化を支えて未来に繋いで、さらには阿波おどりの関わりをきっかけに、徳島市への多様な関わりへの発展を期待しているという考え方です。こうした本市の取り組みがお祭りイベントのモデルになればいいなと考えています。

(4頁)

個々の内容を説明する前に、近年新型コロナウイルス感染拡大で、ちょうど、開催時期が8月の12～15日と、お盆の時期ですので、感染拡大とかぶっている時期も多いですが、お祭りの運営課題を検証しながら阿波おどりを止めることなく開催してきました。

令和2年度は秋、令和3年度は縮小開催、今年は3年ぶりに街中で本格開催を行ったところでは。

(5頁)

関係人口に関する取り組みについて、まずは「踊る阿呆」から順に説明します。阿波おどりの踊り手のグループ、皆さん、ご存じかどうか分かりませんが、これを連(れん)といいます。連には1年中通して練習している連や企業の連、各大学、高校、コミュニティで編成している連があります。県外から踊りに来ているファンも大事にしながら、次世代の関係人口づくりにも徳島市は取り組んでいます。

阿波おどりは夜がメインだと思っていられるかもしれませんが、昼間にも屋内会場で選抜阿波おどりを開催しています。この選抜阿波おどりは従来協会に所属している有名連、1年中練習している有名連だけが参加できるものでしたが、令和3年からは大学生、高校生など、若い子が出場できる選抜阿波おどりに変わっていています。

これまで以上に、どうして若者の参加機会を設けようとしたかと言うと、市内の高校や大学を卒業して、もちろんできれば、徳島に残ってもらいたいです、たとえ県外に出たとしても踊り手、ファン、そういう部分で阿波おどりに関わっ

てくれる子たちが増えるといいなと考え、いわば未来の関係人口への種まきとも言えると考えています。

下にダイバーシティとくしま連があります。阿波おどりの魅力を国内外に発信し、ファンを増やしていくことを目的に、徳島市自体が踊り手を広く募集し、市で編成してみんなで踊ろうよ、という連です。

実際今年も開催し、県外参加者もいました。そして外国人や障害のある方など多様な方々もご参加いただいています。多種多様な人が阿波おどりを楽しんでいただけるように徳島市としても取り組んでいるところです。

(6頁)

次に見る阿呆です。もちろん見る方、観光客はもともと多いですが、全国や世界のたくさんの方々に直接阿波おどりを見に来て欲しいのは当然ですが、特にコロナ禍では会場に来られない方もたくさんいらっしゃいました。

そうした人たちに広く、阿波おどりの魅力を触れていただくために、YouTubeでのライブ配信、また Instagram でも情報発信を強化しました。阿波おどりの観光プロモーション動画も含め、魅力をあますことなく国内外にPRして、徳島市の誘客に繋がりたいと思います。

最近、阿波おどりは有名 YouTuber にも来ていただいたり、撮る阿呆と言われる阿波おどりの写真を撮りに来る方も多くいらっしゃいます。

(7頁)

次に支える阿呆です。オンラインで支援ができる、クラウドファンディング、ふるさと納税など、ネーミングライツにも積極的に取り組んでおり、多大なご支援をいただいているところです。

クラウドファンディングでは、支援者から「これからも長く続いてほしい」、「コロナに負けず来年も盛大に」などと温かいメッセージをいただいております。こういう支援者の声が踊り手や運営に届き、それが可視化でき、みんなが頑張れる取り組みです。

(8頁)

次に支える阿呆として実際に活動している事例です。徳島市が創設した阿波おどりの公式アンバサダーですが、今、県外を含め 200 人くらいに登録いただいています。実は今年の阿波おどりのポスターも、阿波おどり公式アンバサダーの 1 人の方が撮った写真、提供されたものが採用されて実際のポスターになっています。

登録して、PR もしていただきますが、このポスター写真に使われるなど積極的に活動していただいています。

次に清掃活動です。大規模な街中のイベントでは、多くの人手で賑わうイベントで、おそらく行政の方がお困りになるのが、街中の大量なごみの発生です。阿

波おどりでも同様の問題が発生します。ここで「支える阿呆プロジェクト@阿波おどり」というのがあり、阿波おどりの運営に協力したいと集まったボランティアの学生たちが、期間中に街中の清掃を実施しています。清掃活動に関わってくれた学生さんたちが、県外に就職してもボランティアのために今でも訪れてくれるという、実績にもなっています。

徳島市としては若者をはじめとして、まちづくり活動や市民活動を応援する意味で、市民活力開発センターをまちづくり協働プラザと改変し、今年拠点を駅前ビルに移したところです。

具体的な関わりしろを設定する、若者に対して具体的な関わりしろを設定してオープンにすることで関わりやすくなり、その人達が次世代の関係人口になることを期待しています。

(9頁)

関係人口の最後はつながる阿呆です。阿波おどりは徳島が本場ですが、関東とか他にも全国に広がっていて、中でも有名な高円寺や南越谷の阿波おどりは相互に参加するなど、そうした交流も含めて、古くから交流が続いています。

各地域の阿波おどりを相互に盛り上げることで、それぞれが持続可能なお祭りになればいいなと思います。阿波おどり以外にも観光姉妹都市である仙台市のすずめ踊りとも、相互に親善訪問団を送って交流を深めています。元々県も含めて海外交流をしてきましたが、今後もアフターコロナ、大阪・関西万博を見据え、世界との繋がりを進化させていこうと考えています。

以上、走り走りではありましたが、阿波おどりを通じた関係人口づくりについて説明しました。ご来場者の皆さんには、いずれかの阿呆になっていただき関係人口になっていただけると幸いです。本日はご清聴ありがとうございました。

田口先生：ありがとうございました。大都市でも、またこれから出て行ってしまいう若い人に対して、先行的にいろいろな活動の場を創ることで帰る場所づくりみたいなものができているのかと思いました。それでは先ほどと同様に会場あるいはオンラインの皆さんからご質問などあるかたがいらっしゃいましたらいただけたらと思います。

司会者：ご意見、ご質問などを募集します。会場の方は挙手で、オンラインでご参加の方は画面上の挙手ボタンを押してください。まず会場の方からお受けします。

和田村長：高知県大川村です。お二人の発表、ありがとうございました。私は交

流人口や関係人口という言葉に少し違和感を持っています。というのも、ふるさと納税という地域支援制度が創設されているのに、交流人口、関係人口拡大に努力をしている団体に何らかの形、例えば国勢調査と同様に交付税にカウントいただけないものかと考えています。お二人のお考えをお伺いしたいです。

もう一点、徳島市長にお伺いします。7月末のフェスティバルではありがとうございました。大川村では、実行委員会の考え方や高齢化の関係で維持が難しくなっています。高知県のよさこいは、私は正調踊りが好きですが、最近は若者中心の様々な踊りになって維持しているところですか。阿波おどりは正調が中心だと思います。先程市長からお話しがありましたが、今後の発展についてもう少しお話しいただければと思います。よろしく願いいたします。

田口先生：ありがとうございます。まずは関係人口に取り組んでいる自治体への支援としてもう少し交付税的なものがあるとよいということと、もうひとつは、内藤市長にはイベントをどう持続、発展させていくか。では、まず石橋町長から、お答えいただいて、その後、内藤市長から2点お答えいただきたいと思います。

石橋町長：交付税措置については村長さんと同じ思いです。人口減少の中で交付税が減るという危機感の中で、少しでもそこを増やしたいということです。総務省さんには何かよい知恵を出していただいて、よい制度を作っていただきたいと思います。

ただ交流人口・関係人口と捉えた場合の交付税措置を考えると、私の考えですが交流人口で交付税をとというのは、ちょっと厳しいと思いますが、関係人口であれば、特に最近は二地域居住というのがあり、住所は東京でもしよっちゅう、大川村に訪れる、住んでいるのも当然だとなれば、まさに、関係人口の一番強いところだと思います。二居住、三居住でもいいですが、そういった点に考慮していただければと考えます。今日、尾身副大臣も来ていらっしゃいますが、そういった同じ思いでございます。

田口先生：ありがとうございます。では、内藤市長、いかがでしょう。

内藤市長：ありがとうございます。そもそも地方創生は、頑張っている地方都市にはそれ相応の見返りがあると、スタートしたように記憶しています。いろいろな仕組みがあればいいなと思います。そういう部分のひとつの取り組みがデジタル田園都市国家構想推進交付金や補助金だったりだと私は考えています。

イベントをどう持続発展していくべきかですが、私自身は絶対続けるという

思いがファーストで、その後にお金や人などいろんなものが出てくると思います。人口減少、少子高齢化の中で、お祭りに関わる人がどんどん少なくなっているのは各地方、同じだと思います。阿波おどりは特に地域の人じゃなくても観客と踊り手にあまり境目がない祭りだと思います。その部分で男しか祭りに関われないとか地域の人しか関われないとか、そうした祭りは沢山あるかと思いますが、阿波おどりの強みは、突然来た人も実際に踊れる、お祭りに参加できる仕組みになっています。その意味でも多様性とかがお祭り・イベントに必要なと思います。関わりしろ、具体的に关われる何かを設定することで、村の人だけでない人たちがより参画しやすくなるかだと思います。ご質問ありがとうございました。

田口先生：よろしいでしょうか。

和田村長：ありがとうございました。

司会者：続いてはオンラインからも質問をいただいています。三好市長、高井様、つながっていますでしょうか。

高井市長：三好市長の高井美穂です。パネラーの皆さま、参考になるご意見をありがとうございました。

石橋町長にお伺いします。廃線を利用したトロッコ列車、住民の力で運営ということで素晴らしいと思います。当初、総務省の関係人口創出事業に採択されたということで、スタート時は補助金があったのかもしれませんが、事業を続けていくためのランニングコストは、どのように捻出されているのか教えていただきたいと思います。

スライドの中に、乗車料金、寄付、会費で車両を新造と記載がありましたので、設備投資で収益を上げているのだらうと思います。これからも事業を続けていくうえで、様々なコストが継続的かつ定量的にかかるのではないかと思うのですが、どのように生み出していこうとお考えでしょうか。教えていただければと思います。

石橋町長：そこは苦しいところですが、基本的には行政は全く支援していません。NPO 法人さんが自前で収支計算して、コストも賄っているところです。もちろん会費も取りますが、トロッコに乗っていただけるお客様を増やしながら、そこで収入を得て、おそらくギリギリのところで作っておられるものと思います。JR 西日本が廃線になったときに、持参金というものがあまして、それにはまだ手を

付けていませんが、とりあえずは、NPO 法人さんでやってみてほしいと、それでも足りなければ相談に乗ろうというのが行政としてはありますが、今のところ何とかやりくりされてやっておられる状況です。人件費もほぼ手弁当でやっておられます。ルールなどの保守点検もほとんど手弁当でやっている。それが関係人口の方々に手伝っていただいております。そういうことで、関係人口は必要だなと実感しております。

田口先生：ありがとうございます。高井市長、いかがでしょうか。

高井市長：やはりランニングコストが苦しいというのは、他の自治体でも同じような課題を抱えていると思います。関係人口になった方にその地域で働いてもらいたいとか、今後あると思います。そのときに、収入があれば継続してやっていけるといいますし、本市もいろいろと知恵を絞りたいと思います。ありがとうございました。

石橋町長：ありがとうございます。一点だけ申し上げますと、地域おこし協力隊の制度を使っています。3 年間はその方が入って一緒にやっています。ありがとうございました。

高井市長：ありがとうございました。

司会者：ありがとうございました。続いて会場からの質問を受け付けます。挙手してくださった方、こちらの方にスタッフがマイクをお持ちします。マイクを受け取られてからご質問をお願いいたします。

藤原町長：福島県川俣町から参加いたしました。皆さんの素晴らしいお話しありがとうございました。今回は内藤市長にお尋ねします。当町は人口減少により、現在 1 万 1000 人ほどです。町の一大イベントとして、中南米音楽祭を開催し、音楽が好きな人に毎年全国から集まってもらい、イベントを開催しております。

4 年間は新型コロナの影響により中止していましたが、今年やっと開催できました。例年の半分の 100 団体ぐらいで開催しました。阿波おどりは 400 年続いているそうですが、400 年続けるには苦労もあると思います。後継者づくりなど、どうなさって 400 年続いたのか。我々もこれから 50 年、100 年と続けるには、過疎の町では厳しい状況に追い込まれることもあります。参考になるお考えがあれば、是非教えていただきたいと思います。

内藤市長：後継者づくりとか持続可能なという部分では、私もすごくキーワードと捉えています。特にコロナ禍で、2年間、ほぼ3年間、街中での阿波おどりができなかったということで各連、特に有名連が踊れないとか、医療従事者や、会社から止められている方が自発的に阿波おどりの練習には参加しづらいということで、連の浴衣を返しに行く方も多く見られました。

ただ、その中で、まだ踊りたいという情熱を持つ人たちもすごくたくさんいたことも事実で、そういう人たちに対して行政として何ができるのか、ずっと常に考え続けることが必要だと思っていました。ということで、2020年度も夏の阿波おどりはしませんでした。秋に観光庁から補助金をいただいて阿波おどりのネクストモデルですとか、試行的にコロナ禍でどうやって開催できるかやりました。2021年に関しても縮小開催というかたちで、「とにかくやる」、やりつづける姿勢を見せて踊れる環境にある人たちのモチベーションを保ち続けるということを行政としてはやれたかなとは思っています。

もちろん、連の人たちも頑張っていて、子どもたちが踊れるようなユースの連みたいなのを作られているところもありますし、徳島市と連携し小学校に出前授業に行ったり、鳴り物の後継者も必要ですので三味線教室を、この前も徳島市で初めて文化振興公社主催で行いました。そういうことも含めて後継者の育成には努めています。興業という意味では補助金をいただいたり企業や個人についてもそうですが、ふるさと納税やネーミングライツも活用しながら、持続可能なお祭りを作っていきたいと考えています。

藤原町長：ありがとうございました。

司会者：引き続き質問をお受けします。オンラインでご参加の方は画面の挙手ボタン、会場の方は挙手をお願いします。真ん中の方で手を挙げてくださいました、どうぞ。

酒井市長：大阪府の貝塚市長の酒井と申します。石橋町長、内藤市長に伺います。関係人口の広域連携についてです。定住人口は限られたパイの取り合いで、なかなか広域連携が難しいと実感しているところですが、交流人口・関係人口となると、いろいろな地域資源をいかして広域連携できる展望があるかと思えます。

石橋町長の話でも、三次市との連携もありました。大阪府貝塚市では、関西国際空港の近くで、これから関空をいかして交流人口、関係人口の拡大を図っていききたい、連携を拡大したいという思いがあります。今総務省が進めている、地域の未来予測、これから税収が減って、インフラ、公共施設が老朽化するという、難しい状況のなか、これから地域がどうなるか、客観的に予測して、それを乗り

越える将来像を共有しようと。それを広域連携でやっていこうと、特別交付税を措置すると。定住自立権などのこうした制度をグルーピングして、支援する制度もありましたが、三大都市圏以外を想定していることもあり、大阪府の大都市郊外では使いにくいものでした。

今回の地域の未来予測の広域連携では、大都市圏も対象に入っていると、私も制度として使っていこうと周囲に声かけしているところです。関係人口拡大に対して、広域連携の取組み意義を、お二方から拝聴できれば幸いです。

田口先生：どちらからいきましょう、内藤市長からですか、よろしく申し上げます。

内藤市長：総務省の関係人口創出事業で、初年度のとき徳島県が採択されましたが、私自身、そのときに県で委員もさせていただいて、事業の推進もさせていただいていたのですが、徳島県でやられていたのが、佐那河内村、美波町、美馬市の取り組みでした。横のつながりを作っていることが必要だと感じたので、県内の関係人口も私自身はすごく必要だと思います。

その中で、徳島市は徳島県東部の DMO の会長を私自身やっております。徳島駅、皆さんはどのようなルートで本日来られたかわかりませんが、空港から来るにしても、徳島駅までバスがあるとか、関西からもバスで来られるとか、徳島駅を拠点に南だったり西だったりに行きやすいのかなと思います。

先程水都と話しましたが、ライトな遊びは徳島市でもできます。例えば釣りとか、サーフィン、サップなどもできますが、南に行くほうが世界的な釣り大会ができる場所があります。西にいくとラフティングの世界大会もできる場所があります。徳島市をハブにしてもっと県内に広がる観光の関係人口を創うことができればいいと思います。県内だけでなく、例えば、淡路など、そういったところと観光連携をするなど、関係人口は一緒になって創出する取り組みが必要だと思います。特にこれからインバウンドが復活しますので、そのお客さんからみたら、県という単位は関係ありませんので近くの市町村で連携するのは必須だと思います。

石橋町長：今、市長さんがおっしゃったように、その視点は重要なことだと思っています。事例の廃線後の活用についても、鉄道はつながってなんぼの世界ですから、より魅力を高めるには、わが町の魅力だけではたかがしれていると思います。実は、お隣の広島県三次市さんと協議中でして、三次市にもトロッコを走らせませんかと呼びかけています。だいぶご理解いただいておりますし、議会でも採択いただいているようです。そうなると県境を越えて橋を何回も渡るポイント

トがたくさんありますから、全国にはこれしかないという唯一無二の鉄道資産になるのではないかと考えています。もう少し大きな考え方、邑南町は経済圏は広島になるんです、1時間で結ぶので。そうすると広島市長さんが言っているんですが、広島市を中心とした200万人広域連携都市構想を提唱されています。従来は広島市を中心に広島圏内のみでと考えて持っていたんですが、島根県境をこえて広域連携をやろうということでさまざまなことについて、今、邑南町をはじめチャレンジをしている状況です。県境は観光を考えても無意味なことです。ぜひ成功させたいという思いでいっぱいでございます。

酒井市長：大変参考になりました。岸和田市長とともに頑張ってください。ありがとうございました。

司会者：そろそろお時間も近づいて参りました。最後に田口さんからお願いします。

田口先生：ありがとうございます。あと10分ほどなのでまとめの話をします。関係人口は難しい概念で関係性なんです。外側と内側で何がつながるかが大事だと思っています。

先ほど邑南町石橋町長から話がありましたが、鉄道、廃線という特殊な発信力があるものがあると、ものすごい廃線や鉄道に対する情熱が高い人がぐっと集まる。その場合、おそらく鉄道が大事な人にとって「邑南町」という自治体の枠組みはあまり大事ではない。鉄道というネットワークが重要と捉えられる。その場合は県境を越えて、自治体の枠にとらわれずに考えていく必要がある。

一方、邑南町の小さな集落の場合は、集落が大事で、そこに広域連携がどれくらい繋がるかなどは、冷静に考えないといけない。

もう1つは、内藤市長の話にもありましたが、阿波おどりは踊りながら関係性を作るイベントみたいなところがある。徳島市に越してきて、すぐに阿波おどりの連に所属しなくても毎年踊っています。それができるのが1つの特徴です。関係人口づくりにはいいのかなど。

阿波おどりというものの地域課題は何かというと、地域が見えにくい気がします。イベントが持つ課題があると同時にそのイベント開催している地域がちょっと見えないところもある。

鉄道に関してもそういう気がします。鉄道と地域がどうつながるかが、十分見えにくい。でも実際は鉄道の皆さんが鉄道保全以外にも広がっている。これはアニメの聖地巡礼でもおきています。巡礼で訪れた人がアニメの舞台になったお祭りにも参加するようになり、意見は分かれると思いますが、アニメの人たちが

神輿をかつぐようなことがおきている。これは何かをきっかけに地域とうまくつながった例。地域課題をどうきちんと見つけ出し、その解決のパートナーとして、地域の内側にこだわらず外の人とどう付き合うかが関係人口のミソです。今、後半になると、「関係人口」と「観光」との関係がわからなくなってきているので、ここは注意をしないといけないと思っています。

関係人口のモデル事業に私も関わりましたが、年度末に報告会していただきました。感じることは、何のために関係人口が必要かの議論がまだ十分ではない。移住者の予備軍としての関係人口だとか、観光と何が違うのかと。元々邑南町で説明があったように、交流疲れから実質的關係にシフトする必要があるものの、関係人口施策が地域の体験行事になるケースが結構ある。

このとき、地域側がどんどん疲れてしまうことがあります。大きな地域のビジョン、どこにボトルネックがあるのか、解決の担い手として地域住民以外の人を、地域自身がどう位置づけるかを考えないといけない。どうしても行政施策で終わってしまう。

石橋町長から NPO の独自運営でやっているとのことでしたが、持続性であると同時に、NPO の体力に依存する面がある。地域住民に対して、行政が支援する場合は、広域的な説明をちゃんとできないといけない。このバランスをどうとるのが関係人口との取組の難しいところでもあり、ポイントなのではという気がしています。

本日多様な自治体の取り組みの説明がありました。上士幌町における取組、一戸、邑南町、徳島市の事例がありました。自治体によって関係人口のイメージや地域課題も違う。地域住民だけでは難しいところを外部から願います。このとき、地域が主語であることを忘れずに建付けを行政としてどう考えるかが、大事なところかなと。なかなか難しい問いに対して職員のマインドセットをどうするかという議論もありますがこれは、ぜひ今日お集まりの首長の皆さんにリーダーシップをとっていただき、モデル事業があるから飛びつきましたではなく、自分たちの地域にとってどういう力が必要なのか。それは関係人口というやり方が正しい形なのか、地域おこし協力隊が大事なのか、あるいは企業人なのか、ふるさと納税が大事なのか、今回の会は関係人口が取り出されてしまっていますが、実際は地域づくりのフェーズはもっと長く、それぞれ、フェーズによって考え直さなければならないということがあると思うんです。

テーマは関係人口だったのでたくさんそれについてご紹介いただきました。今日、聞いてくださっている方には、総務省の前であまりいうのも悪いのですが、関係人口の施策を取り出さずに、いろいろな施策を上手に、今日の話もふるさと納税のクラウドファンディングなど、いろいろ混ぜ合わせていく。これはきちんとシームレスにつながっていった地域住民の、僕の言い方では自治力を発揮す

る。冒頭のデジタルもそうだが、ツールなんですね。そのツールを上手に使いこなしていけるかが、人口減少が進んでいく地域ですね。別に過疎地域に限らず徳島市でも同じ実態があると思います。

人口が減りつつも、マンパワーを維持するためにも、地域の問題が問題にならないように、或いは発展するためには、どういう取り組みが必要なのか。それぞれの職員、リーダー、住民の皆さんがクリエイティブに考えていく。いろいろなツールが用意されていると前段の話にもありましたが、これを提供されたから、取り組まないといけないんだ、ということではなく、地域が中心となって飛びつくのか、どうなのか。飛びつき方もがっぷり四つなのか、その辺のデザインが今問われているのではと思います。

だからといって、こうすればいいですよという回答はないといういい加減な落としどころですが。今日、リーダーの皆さんが集まり、それぞれの取組を紹介してくださった。同じような課題認識を持っているということでこれから関係人口にかかわらず、いろんな取組を実践していき定期的に集まって情報交換をし、お互いに勇気づけあいながら、私も研究者の立場で関わらせていただき、その中で何を発信するべきか、考えながらやっていくのが重要だと再認識しました。

ですので、関係人口って、人口という物理的なパイが減る中で、可能性のある数字だと思います。ただ質的概念だということを忘れてはいけないと思います。地域を主語にして覚悟できるかを皆さんとこれから考えていきたい次第です。では、あと3分ほどで終わります。

私のまとめとしては、皆さんと引き続き地域の明るい未来のために考えていきましょう。では先ほど徳島市の音が出なかった VTR が準備ができたとうことです。それを見て締めにしたいと思います。では皆さんお疲れさまでした。どうもありがとうございました。